

ギャレンが撃つ！

外の神様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の事故のせいでアカメが斬る！の世界に転生することになつてしまつた大鳳朔
夜

仮面ライダー剣のサブライダー

仮面ライダーギャレンの力を手にし彼は世界に革命を起こせるのか？

目

第1話
第2話

第二の人生

青い畳にご注意を

次

7 1

第1話 第二の人生

少年が目覚めると、そこは前も後ろも、上も下も右も左も全てが白一色の空間だった。

「・・・・・こは・・・」

「あなたは死んだのですよー

「え?」

俺は声がする方向に振り返った、するとそこには幼女?が立っていた。

『幼女じやありません!』

『なぜ心の声を?!そんなことよりどうみても幼・』

『幼女じやなくて神様です!』

『いやいや、こんな小さいのが神様な訳が・・・』

『だから幼女じやないです!それに貴方今自分の状況わかつてますか?死んだんですよ

？死んだんですよ！？』

「そうだな、死んだみたいだな」

彼はさつきまでの態度とは打って変わり、冷静に答えた。

『やけに冷静ですね・・・』

「だつて、だいたいの場合仮にあんたが神様として、あなたのミスで俺を死なせたかぐらいいだし」

『な、なるほど・・・』

「まあ、それは置いといて理由の方は？」

『すみません私のミスです』

神様（仮）はその場で俺に謝った。

「んー、まあここまでテンプレのようなものだな」

『テ、テンプレですか。それにしても怒らないんですね』

「まあ、だいたいわかつてたし」

『それではこれからどうなさいます？』

『転生はできるのですが・・・』

「転生するといつても世界は？」

『アカメが斬るの世界です』

「知らないけどまあそれでいいか、ただし特典だけは付けてもらうからな」

『わかりましたそれでは、何にしますか？』

特典は

1. 仮面ライダーギャレン関連の物全て
2. 身体的能力上昇の上限を底なしに
3. 敵に攻撃が命中するたびにAPの回復とAPを消費し味方の回復ができるよう

に

『APを消費して回復というのは？』

「ギャレンじやないがリカバーキヤメルっていうカリスのラウズカードがあるんだ、それと似たようなカードをさ」

『わかりました、なんとかやつてみます。それと私個人の理由ですが、原作の知識をあなたに授けておきますね』

「それはおまけってことか？」

『あなたをミスで殺してしまつたつていう理由とあなたが知らないという事なので』
『なるほど、めちゃくちや死人出るのか・・・特典をつけておいて良かつた』

『それとひとつ、あなたの特典の一つ回復ですが、あくまで傷を回復させるものですから
そこは覚えておいてくださいね？』

「ああ、わかった」

そして、転生する時が来た。

『そろそろです、では第2の人生楽しんでくださいね』

「いや、そんなこと言われても楽しめそうにないんでＳ・・・」

言い終わる前に意識が遠のいていき目の前が真っ暗になつた。

ほしい。

俺がこの世界に転生してもう4、5年の歳月が流れていた。

転生した時の年が多分14歳くらいだったから今は19だ。結構歳くつたな・・・

そして俺は今原作の舞台、愛車のレッドランバスを走らせ帝都へと向かっていた。

帝都に向かう前、そう転生したての頃はずつと危険種を狩つたり食糧を確保したりして山の中にある小屋で生活をしていた。

そのおかげか戦い方も自然と身についた。

「ん？ あれは？」

バイクを走らせていると少し先に馬車が倒れているのが見えた。

俺は少し速度を上げてその馬車の所へと近づいていった。

「何かあつたのか？」

俺は愛車を倒れている馬車の後ろに止め、倒れている馬車を起こそうとしている2人組に声をかけた。

2人は俺に気づくと何があつたのかを普通に答えてくれた。

「それが、ついさつきそこにぶつ倒れている土竜に襲われてな」

「つまり馬車で荷物を運んでいたら土竜に襲われあんたら2人で倒しと」

「いやいや、俺たち2人じやあんなの倒せないよ たまたま……かどうかは知らんが通りかかった少年に助けてもらつてな、確か名前はタツミだとか…… タツミ……という言葉に俺はすぐに反応した。

「その少年タツミって名前なのかな？」

「ああ、確かにそういつたぞ？なんだ、知り合いなのか？」

「いや、知り合ひってわけじやないが・・・とりあえずその少年は今どこに？」

「帝都で出世するとか言つてついさつきここから帝都に向かつて行つたよ、今すぐ行けば多分追いつくだろう」

「そうか・・・色々と教えてくださいありがとうございます、それではこれで」

（タツミか・・・どんなやつなのか会うのが楽しみだ）

俺はそう思ひながら愛車に跨り、タツミを追うためにレツドランバスを走らせた。

第2話 青い畳にゴ注意を

俺はタツミに追いつくためにレッドランバスを走らせていた。すると少し走つたところで目の前に人影が見えた。

「お？ 人影が・・・とりあえず、おーい！」

俺は人影に向かつて叫んだ、するとそれに気づいたのかその場で止まり振り向いてきた。

「ふう、やつと追いついた・・・お前がタツミか？」

「なんで名前をつて驚いた顔をしているがすぐに、ああ、あの2人かなつて顔になつた。」

「そりあえず、あんたは？」

「俺はサクヤ、帝都に向かつてゐるんだがある2人からお前が帝都に向かつてゐるって聞いてな、向かう場所が一緒つてことだし・・・どうだ、乗つてかないか？」

「うーん・・・乗せつてくれるのは嬉しいんだけどさ、俺の他にも2人帝都に向かつて

る奴がいるんだ、俺だけ樂するのは気がひけるからなその気持ちだけもらつておくぜ」
（2人・・・サヨとイエヤスつて名前の男女か・・・）

「わかった、んじや俺はこれで・・・もし帝都で会えたらそん時はその2人のことも紹介してくれよ？それじやあ」

俺はそう言い愛車を帝都に向かい再度走らせた。

「ああ！会えたらきつとな、ただ1人は帝都についてるかすら怪しいからな」

タツミは手を振り俺を見送つていた。

（帝都に着いたら、そこが物語の始まりの地点だ・・・ただ運命を大きく動かすのはあの夜だな・・・その時が来るまでちゃんと準備をしますか）

俺はそう思いながら速度を上げ、帝都へと急いだ。

そして・・・

「目的地の帝都に着いたぞ！知識ではあつたが・・・想像以上に賑わつてるなあ」

だけど、これだけ賑わっていても感じ取れる嫌な雰囲気がある・・・
「とりあえず、宿を探そう・・・しつかり休んであの夜に備えなきやな」

そして俺は帝都へと足を踏み入れ宿を探し始めた。

ちなみにレッドランバスは帝都近くの森に隠しておいた、無人走行機能などがあるからこつちで制御すればいつでもすっ飛んでくる。

それにもまさか無いはずの機能・・・カモフラージュがあるとはな。

そして翌日の晩、黒髪赤目の少女と
その黒髪の少女と相対するタツミ。

「強い・・・恐らく今の俺が闘つて勝てる相手じゃ無い・・・けど、アリアさんを逃がさ
ないと！」

「お前は対象では無いが・・・邪魔をするのならば、葬る」
一晩の恩だけど、アリアさんだけでも逃がさないとな。

でも、そのアリアさんは腰を抜かしてしまつており一步も動けないような状態だ。

それも仕方ないことだよな、いきなり訳の分からぬ連中に襲われて、家族もみんな殺されちゃあこうもなるよな。

けど、ここからどうする？

そんなことを考えていたら聞き覚えのある声が聞こえた。

（あれは、タツミと…あの黒髪の女の子はアカメか。ついでに今あつちから歩いて来ている金髪の女性はレオーネか。つまり原作が始まつたつてことだ）

俺はそれを確認すると、とりあえず2人の間に介入した。

「騒がしいと思ったら、まさか先にナイトレイドが来てているとはな…面倒なことになつたな」

タツミは俺を見た瞬間に驚いた顔をした、そもそもそうぞうだ知つた顔が突然こんなところに現れたんだからな。

「サ、サクヤ!? お前こんなところで何してるんだよ! 逃げろ!」

「タツミか・・・お前こそ今のすぐここから離れる、ただしそこの女の子は置いて行けよ?」

「ア、アリアさんを置いてけつてどういうことだよ!」

「それはだな・・・「話してるとこ悪いけど・・・お前、何者だ?」

俺がタツミの質問に答えようとした瞬間それを遮るようにレオーネが俺に質問を飛ばしてきた。

「タツミ、お前の質問には後で答えてやる・・・何者つて言われてもな・・・とりあえず帝具使いつて名乗つておくか」

俺はそう言い懐からギヤレンバツクルを取り出しバツクルの中心部のラウズリーダーにダイヤの1、エースのカードを装填し腰に取り付けた。

「な!? させるか!!」

レオーネが帝具は使わせないと言わんばかりに一気に距離を詰めてくる。

「もう遅い! 変身!」

俺は変身と叫びバツクルに付いているターンアップハンドルを引く。

『Turn Up』の機械音声と共にリーダーが回転し、サクヤの前にオリハルコンエレメントを放送出する。

突然出てきたそれにレオーネは反応しきれず激突し弾き飛ばされた。

「な・・・!?

そのまま俺は前面にあるオリハルコンエレメントの方へ走りそれを通過すると、赤いスーツに銀色のアーマー、胸にはダイヤの模様、頭部は緑の複眼にクワガタの様なマスクが付けられているギャレンアーマーを装着し・・・仮面ライダーギャレンへと姿を変えた。

「さて、始めるか」

俺はそう言い右手にある醸銃ギャレンラウザーを構えた。

突然現れ、自分は帝具使いと名乗る男サクヤとナイトレイドのメンバーレオーネの闘いが、今、始まる。